



第2回

麒麟か反逆者か「明智光秀」

講談師 一龍齋貞花

二週間遅れながら順調なスタートを切った大河ドラマ「明智光秀」

謎の多い人物とされるが、出生年が四つあり、明智軍記のみ一五三一年生れと計算が合うが、これとて五十五歳で死去から逆算したのではなからうか。出生地が六か所、産湯の井戸が、岐阜県可児市、恵那市、瑞浪市、山県市と四か所も。赤ん坊のたらい回しは無いです。側室一人も持たない息子との子ども、子孫系図三男五女、明智系図が六男五女、明智軍記が三男四女、太閤記が三男三女。確実に判っているのは、細川忠興に嫁いだ玉カシマ織田信長の甥信澄と、側近の明智秀満に嫁いだ計三人の娘と伴の十五郎光慶の一男三女。側女が何人もいれば不明もあるが本妻一人でこの記録。光秀ほどの武将でこれほど謎の多いのも不思議。その他謀反の原因も謎だらけ。有

名作家も歴史家も、これが真相とは言えないでしょうね。

ここは講釈師の見てきたような話しにお付き合いください。

光秀が信長に仕えて間もなく、側近の者から、「光秀の妻は天下一の美女です」と聞くや、熙子に登城を命じ、長廊下の物陰に隠れて、熙子を通り過ぎるところを抱きついたというエピソードも。疱瘡のあばたもたいしたことなかったんでしょう。誰もがうらやむ美人だったようで、娘の玉、後の細川ガラシャは、熙子よりさらに美人だったといえますから、ミス日本です。今なら上司のセクハラ。いくら光秀でも採用されて間もなくで「うちの妻になにするんです」とは、言えなかったことでしょう。

京都での軍事パレード馬揃えの責任者を務め、こうした手柄によりさらに頭角を現していきます。

光秀を支えた家来に三宅秀満。光秀の娘玉の妹と結婚し、明智の姓を与えられ明智左馬之助、講談や物語では湖水渡りをした光俊と言いますが、本当は秀満です。

春日局の父親齋藤内蔵助利三トシみつ。光秀の家来でしたが、重臣稲葉一徹が懇望して一徹の家来となったが、一徹の家来のいじめもあり光秀の元に逃げ帰り、一徹が返して欲しいと信長に訴え、信長も返せと言ったが、光秀が返さなかったのではなく、利光が帰らなかつた。返さないと誤解した信長が光秀に腹を立てたという説も。

その他家臣団は、美濃出身者、室町幕府に仕えていた者。光秀が支配した山城、近江、丹波の国衆などを配下に

加え、家臣団を形成していきました。

道三が討たれたあと、朝倉義景、足利義昭から信長と、主人を代えながらチャンスをものにして出世街道を邁進、正に中途採用の星。

優れた知略、儀式、作法に通じ、茶の湯、和歌、連歌を好む教養豊かな武将でありました。

信長との齟齬

信長は、組織と機動力で次々と強敵を撃破、その先兵として働き、難攻不落と言われた丹波の国を平定。

「明智が、丹波に出陣し度々戦果を挙げたことは、比類なき功績である」

と称え、恩賞として丹波一国を与えられると、丹波の農民に徳政令を行い、滞納していた年貢を免除してやるなど、善政をもって丹波を手中に収め、



光秀にとって最良の日々でありました。

ところが、丹波篠山の波多野秀治が光秀を裏切り、光秀は無残な敗北を喫し、本拠坂本へ退却。

信長が「和議を結ばば許す」と。そこで話し合いを重ね、光秀は母の於牧を人質の形で波多野に送り、和議が整います。ところが信長が、

「こやつ、裏切り者」と、波多野を殺害。そのため人質である母於牧が殺されてしまった。

光秀にとって、これは信長に恨みを持ちます。

ある宴会の時、下戸の光秀が盃をほさぬのを見て、信長は、光秀の背中へ馬乗りになり、

「酒が飲めぬのなら、これを飲め」と言つて、刀を突きつけたとか。

信長が可愛がつている森蘭丸に、「望みのものがあらば言つてみよ」

「ほかに欲しいものはございせんが、ただ近江の志賀郡は父三左衛門可成の旧領にございますれば、父の所領を相続しようございます」

「それは三年待て、三年後には汝の所

領とするであろう」

近江の志賀郡は光秀の領地。あたりに人無きと思いきや、連歌師の里村紹巴が次の間にてこれを洩れ聞き、光秀に知らせ、光秀大いに驚き、

「さては三年後には殺され、領地を蘭丸に奪われるのかと、恐れかつ恨みを持つようになったこともありまし。

天正十年春、信長の長男信忠が十万の軍勢を率いて武田家を滅した時、

光秀が、「我らが苦勞した甲斐がありました」と、祝いの言葉を。すると信長、

「おのれに、なんの功があつた」と激怒して、光秀の頭を欄干に打ちつけ、家来の前で大いに恥をかかしたとか。「信忠殿のお力で」と、言えよかつたんでしようが、それにしてもやりすぎ。パワハラもいいところ。

じつところらえる光秀を見て、蘭丸が、「殿、光秀め必定謀反を起こすでありますよ」

蘭丸に先見の明というより、光秀をおとしいれようという言葉ではなかつたか。亡き父の所領志賀郡を有している光秀を面白く思つていなかつたかもしれませぬ。尤も謀反というのは、後

に光秀が謀反を起こしたことから、歴史家なり小説家なり、イヤ講釈師が考へたことかもしれませぬが。

信長は、「なにほどのことやある、心配いたすな」と。

惠林寺が武田の残党をかくまつたのを怒り、信長が焼打ちを命じたところ光秀が、

「よろしくございませぬ」「余の言葉に逆らう、不埒な奴」と、光秀のもとどりを掴むや、頭を打ち据えたことがあつたといひます。

光秀は、比叡山焼打ちの時には、先頭に立つて功を立てています。この時は、中途採用されて間もなくで、アピールするためであつたかもしれませぬ。

惠林寺の時は、重役になつており、自分の意見を言つたんでしよう。

信長は、性格的に光秀と合わなかつたのではないか。可愛げのある、取り入るのがうまい秀吉と違つて、優秀なだけに、

「きんか頭め、どうも小賢しい奴」しかし、実力は認め、利用、活用したのではないかと、私は思つています。

これはどの本にも書いてありませんが。

土佐の長宗我部と、阿波の三好がしのぎを削る四国制圧を目指す信長は、四国担当に光秀を任命。光秀は長宗我部元親に、

「信長公に忠誠を尽くせば安泰」と、重臣齋藤利三の妹と元親を結婚させ、元親は安心して戦い領土を広げていきます。

すると信長が突如として、「讃岐と阿波は、三男信孝と三好に任せる」と通達。

これでは長宗我部は滅亡してしまふ。元親を支援している光秀の面目丸つぶれ。おまけに四国担当を外されてしまった。

天正十年五月、元親が書いた、「齋藤利三は、四国の儀を氣遣いに存ずるによつて、明智殿謀反のこといよいよ差し急がる」

という書が残つており、義兄弟の利三と元親がなんらかの連絡を取り合つていたことが伺われ、つまり光秀は重臣から「信長討つべし」と突き上げられていたのかもしれない。これもどこにも書いてありませんが。

明智光秀、いよいよ佳境に入つて参ります。次回お楽しみに。ポポン